



👁️👁️ みどころ

長く興行収入NO1の座に君臨していた『タイタニック』(97年)(1800億円)を破ったのが、同じジェームズ・キャメロン監督の『アバター』(09年)(2700億円)。中国の『戦狼2』(17年)がすごいといっても1000億円だから、やはり“米中对決”は今のところ米国が上だ。

すると、木城ゆきとの「銃夢 (ガンム)」を、『アバター』以上の“SFXもの”でスクリーン上に登場させた本作は、さらにその上を・・・?その世界観の壮大さ、アリータのつぶらな瞳の大きさの魅力、そんな点を見れば、そんな期待も高まるが、多分それは上滑り・・・?

あなたは、生身の人間の格闘と、サイボーグ人間のそのどちらが好き?本作に登場するさまざまな(奇妙な)サイボーグの造形が好き?そんな好みの問題を含めて、さあ本作の評価は?興行収入は?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■興行収入歴代1位、2位は?J・キャメロンの狙いは?■□■

近時の進出が著しい中国映画の中、2018年は『戦狼2』(17年)が約1000億円の興行収入を挙げたが、長い間興行収入歴代第1位の座に君臨していたのが、ジェームズ・キャメロン監督の『タイタニック』(97年)。その額は、約1800億円だった。その後、約2700億円を挙げて『タイタニック』を抜き、新たにトップに立ったのは同じくJ・キャメロン監督の『アバター』(09年)だった。3D大作の同作は、魅力も倍だが、疲れも倍?私にはそんな実感で、「やっぱり私には、ジェイクとネイティリよりジャックとローズの方が・・・。」と書いてしまった(『シネマ24』10頁)。

J・キャメロン監督は『ランボー／怒りの脱出』(85年)でも有名だが、それ以上に『ターミネーター』(84年)や『エイリアン2』(86年)で有名。さらに、『タイタニック』より『アバター』の方が興行収入が良かったこともあって、1954年生まれだから私より5歳若いだけの彼は、近時ますます3D映像を駆使した“SFXもの”に熱中している。その最たるものが、『アバター』の続編4作の制作で、『アバター2』は2020年に公開予定らしい。そんな彼の次なる狙いはナニ?もちろん、それが本作だ。

■原作は『銃夢 (ガンム)』!監督はR・ロドリゲス! ■

そんなJ・キャメロン監督だから、『パンズラビリンズ』(06年)で不思議な世界を醸し出し(『シネマ16』392頁)、『シェイプ・オブ・ウォーター』(17年)でアカデミー賞作品賞と監督賞をゲットした(『シネマ41』10頁)メキシコ生まれのギレルモ・デル・トロ監督が25年前に紹介してくれた日本のSFコミック『銃夢 (ガンム)』に対して、大変な興味を持ったらしい。パンフレットにある「プロデューサーズ・コメント」によれば、『銃夢』の斬新で創造的な世界観に魅せられたJ・キャメロン監督は、直ちに映画化権を獲得し、脚本を書いたのは、彼の娘が13歳の時だったそうだ。

私は『銃夢』を全く知らなかったが、木城ゆきとの原作『銃夢』は1991年から「ビジネスジャンプ」に連載されて人気を博し、1995年まで連載。その後も次々と続編が連載され続けている本格的なSF巨編らしい。その主人公は全身サイボーグの少女ガリィだが、本作ではそれが女優ローサ・サラザールが演じる少女“アリータ”に。アリータの印象的な大きな瞳は、サラザールがパフォーマンス・キャプチャーを使って演じた映像にアリータの特徴的な大きな瞳をCGエフェクトで再現して、原作にリスペクトを込めたそうだが、その完成度はすばらしい。

もっとも、J・キャメロンは『アバター』の制作で忙しかったため、自らは制作・脚本を担当し、監督はロバート・ロドリゲスに委ねることに。このR・ロドリゲス監督も、フランク・ミラー原作のハードボイルド・タッチの“劇画”を白黒基調でスクリーン上にはじめて登場させた『シン・シティ』(05年)の脚本を書き監督した、きわめて個性的な人物。「これぞスクリーンで観る劇画!」とも言うべき同作は新鮮だった(『シネマ9』340頁)。しかして、本作では『アバター』に続いてそれまでの映画では全く観たことのない、新たなヒロイン“アリータ”と出会うことに……。

■“あの大戦”後の未来は?この“世界観”を確認! ■

平成の時代が30年で終わろうとしている今、「先の大戦」といえば、もちろん昭和の時代に日本が起こした「太平洋戦争(大東亜戦争)」のことだ。もっとも、日本史の中で常に戦場になっていた京都では、今でも一部の人々は「先の大戦」=「応仁の乱」という人もいそうだ。しかして、J・キャメロンが脚本を書き、R・ロドリゲスが監督した本作で

いう「あの大战」とは？

それは、没落戦争（ザ・フォール）のこと。これは、300年前に地球がURM（火星連邦共和国）との間で起こした戦争だが、この戦争によって地球上にあった数多くの空中都市が破壊され、ザレムだけが残ったらしい。その結果、地球の“あの大战”後の未来は、天空に浮かぶユートピア都市“ザレム”＝“支配する者”と、ザレムから排出された廃棄物が堆積して山をなす荒廃したクズ鉄町“アイアンシティ”＝“支配される者”という、二つの世界に分断されたらしい。

2月27、28日にベトナムの首都ハノイで開催された2回目の米朝首脳会談の結果がどうなるかはわからないが、現在及び近い将来の世界は米中二大勢力のせめぎ合いになるという“世界観”は共通している。しかし、本作ではこれがJ・キャメロンの脚本による“あの大战”後の未来であり“世界観”だから、良くも悪くもまずそれを確認しておきたい。

さらに、本作はファクトリー（ザレムに必要な物資を送るとともに、アイアンシティを統治する機関でもある。）、モーターボール（サーキットで行われる、モーターボールと呼ばれる球を奪い合う格闘球技。最終チャンプとなった者のみ、ザレムへ行けると言われている。）、センチュリアン（アイアンシティを監視する巨大警備ロボット）、ハンター戦士（アイアンシティの犯罪者を狩る償金稼ぎ。ファクトリーで登録を行うことで、ハンター戦士として活動することが可能になる。）等の“アリータ：バトルエンジェルの世界”特有の言葉や概念が多いので、それについては、あなた自身で一つずつしっかりと！

■□■ “バトル・エンジェル” アリータはこんな偶然から誕生！ ■□■

私の子供時代のマンガにも、『鉄人28号』や『鉄腕アトム』があったし、『巨人の星』では、父親から徹底的に鍛え上げられ、魔球大リーグボールを投げるサイボーグ少年（？）のような星飛雄馬もいた。したがって、本作導入部でアイアンシティに暮らしているサイバー医師イド（クリストフ・ヴァルツ）が、クズ鉄の山の中で発見した少女の頭部（脳）が奇跡的に生き残っていることを知り、これを持ち帰ってサイボーグ少女としてよみがえらせるというストーリーは、十分理解できる。もちろん、その手術は今から300年後のやり方だからメカニックなものだが、多分手術自体は簡単なのだろう。そこでのポイントは、イドが持ち帰った頭部に、自分の死んだ娘の身体を接続したこと。そのため、イドは完成した“サイボーグ少女”をアリータと名付けたが、その意味は？そして、その思い入れは？

他方、イドによって新しい機械の身体を手に入れ、イドのもとで大切に育てられた少女アリータはある日、襲ってきた敵からイドを守るために戦った際、自分の中にコントロールできないほどの戦闘能力が備わっていることを知ってビックリ！これは一体なぜ？もちろん、それにはイドもビックリで、イドですらその理由はわからなかったが、ストーリー

が進行するにつれて、その秘密が少しずつ解き明かされていくことに・・・。

■□■アリータの格闘能力は？その面白味は？■□■

①CGなし、②ワイヤーなし、③スタントマンなし、④早回しなしの4原則によるタイ映画の『マッハ!』(03年)、『シネマ6』194頁)や『マッハ! 弐』(08年)、『シネマ24』194頁)はめちゃ面白い格闘映画だった。また、「今回はムエタイ以外も使います」をプラス1とし、映画史上最強の美少女“ジージャー”・ヤーニン・ウィサミタナンを起用した『チョコレート・ファイター』(08年)も惚れ惚れするような怒濤の生傷アクションが素晴らしく、『マッハ!』を超える最高の映画だった(『シネマ22』173頁)。さらに、私は志穂美悦子が主演し、カッコいい格闘技を見せたかつての『女必殺拳シリーズ』も大好きだった。

そんな私だから、本作の“サイボーグ少女”アリータの格闘技をジージャー・ヤーニン・ウィサミタナンや志穂美悦子と比べながら観ていたが、サイボーグ少女特有の並外れた能力がスクリーンいっぱいに広がり始めると、こりゃ人間と比べるのは無意味だと納得。しかし、そうなると、アリータが見せる格闘アクションの面白味は・・・？

■□■人間の若者との出会いは？恋模様の展開は？■□■

300年後の未来である2214年の世界を舞台とした、リュック・ベッソン監督の『フィフス・エレメント』(97年)は、すべての攻撃を吸収してしまう反生命体である“ミスター・シャドウ”に脅かされていたが、ブルース・ウィルス扮するタクシー運転手が、偶然拾ったミラ・ジョボビッチ扮する「フィフス・エレメントの美女(?)」を助け、現実の世界を教えながら、あつと驚く奇想天外な物語を繰りひろげていく面白い映画だった。それと同じように(?)、本作でイドの娘同様に大切に育てられていたアリータに、アイアンシティとザレムの二極に分断された世界の現実を教え、モーターボールで戦うことの意味や、ザレムに上ることの夢を教えるのが、人間の若者ヒューゴ(キーアン・ジョンソン)だ。

もっとも、『フィフス・エレメント』では、1914年のエジプトのピラミッドで予言されていた、世界を救う5番目の要素である「フィフス・エレメント」を巡る科学論争(?)のモノ珍しさがテーマで、さすがにブルース・ウィルスとミラ・ジョボビッチとの恋模様の展開はなかった。しかし、本作では、ヒューゴとアリータは年頃同士の若者だから、当然のように恋模様が発生。したがって、アリータには育ての親のイドだけでなく、若くカッコいい恋人ヒューゴにも恵まれることになるが、アリータの敵は一体だれ・・・？

■□■ザレムの支配者は誰？支配の構造は？■□■

他方、イドの前妻で、今はモーターボール選手の調整技師(チューナー)をしているの

がチレン（ジェニファー・コネリー）。さら、に本作後半から登場するのが、ファクトリーのオーナーで、モーターボールの支配者であるベクター（マハーシヤラ・アリ）だ。したがって、アイアンシティに住む人間たちにとっては、このベクターこそが最大の権力者で、敵ということになる。

すると今、チレンはベクターと行動を共にしていたから、チレンもイドたちの敵ということになるの？イドたちは今、“ハンター戦士”としてアイアンシティの犯罪者を狩る賞金稼ぎの仕事をしていたが、それはあくまで表の顔で、その真の敵はベクターに設定しているらしい。しかして、本作中盤には、ハンター戦士ながらアリータに敵対心を燃やすザパン（エド・スクレイン）や、逆にアリータと共に闘う女戦士ニシアナ（エイザ・ゴンザレス）らが登場するが、その造形はそろって奇妙なもの。さらに、ベクターの支配下にあつて、目下のアリータの敵として登場する巨大なサイボーグがグリシュカ（ジャッキー・アール・ヘイリー）だが、その造形は・・・？昔人間の私には「鉄腕アトム」や「鉄人28号」はそれなりに共鳴できるが、本作に登場するこれらのサイボーグたちの造形には、かなりの違和感が・・・。

■□■尻切れトンボ？それとも次作への期待！？■□■

目の前の敵はともかく、真の敵は誰？どんな状況下でもその判断が大切だが、本作後半に登場してくるアリータの敵は巨大サイボーグのグリシュカだから、彼は所詮役者不足。いつになったら真の敵、ベクターが登場してくるの？そしてまた、ファクトリーのオーナーで、モーターボールの支配者であるベクターの本当の実力はどんなもの？

それがわからないまま少しイライラしていると、本作ラストでは遂にヒューゴが念願の“ザレム行き”を決行し、アリータがそれを支援するクライマックスになるから、それに注目！そこでヒューゴとアリータの行く手を阻むものは一体ナニ？そして、それを操るベクターの真の正体とは？とはいっても、アリータは人間の脳を持ったサイボーグで、完璧な気甲術（パンツァークンスト）を身につけている上、今やザパンが所持していたダマスカス・ブレードという失われたURMの冶金技術がつまった、装甲をも簡単に切り裂く伝説のブレードを武器にしていたから、アリータはまさに最強兵器。まともに戦ったのでは、人間であるベクターがアリータに適うはずがないのは当然だ。

そんな中、さあ本作ラストの真のクライマックスは如何に？私には若干尻切れトンボの感があったが、それは逆に次作への期待！？

2019（平成31）年3月7日記